

Title	まえがき
Author(s)	吉川, 利治
Citation	重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて (1996), 12: 1-2
Issue Date	1996-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/187531
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

まえがき

本論集は、文部省重点領域研究「総合地域研究の手法確立」の研究項目B01「外文明と内世界」に所属する、公募研究班（平成5年度～平成6年度）「東南アジアの言語資料に見る国家意識の形成」の研究成果である。研究班は、吉川利治（大阪外国語大学）を研究代表者として、桃木至朗（大阪大学）、渡辺佳成（岡山大学）、菅谷成子（名古屋女子大学短期大学部）の4名で構成され、東南アジアのタイ、ベトナム、ビルマ（ミャンマー）、フィリピンを対象地域としてとりあげた。各国が近現代にむけて醸成してきた国家意識の歴史的展開に焦点をあて、各国の主要民族の固有の論理と外文明の国家思想の接点を、東南アジアに保存されている言語資料に求めた。とりわけ国家観の連続・非連続、思考様式の変質・変遷、また国家や民族間の力関係のなかで組まれた正統性原理、外圧への抵抗という外因と少数民族や移民の同化吸収という内因による国家イデオロギーの構築など、現代の国家形成へ至る、自我の思想的論理の展開とその社会的基盤を探る研究をめざして始めた。

吉川利治は、13世紀末に刻まれたタイ語による最古の碑文、ラームカムヘーン王碑が偽作であるという説が提示されて以来、偽作説を否定する圧倒的な力が働く様子に、刻文が持つ今日的な重大な意味・価値が何であるのかをまず考察した。碑文の内容は家父長的温情主義、寛容と同化、交易の自由、宗教と信仰を伝え、これらの内容が解読されるとラームカムヘーン王の時代がタイの理想の国家とされ、伝えるその体制はタイ固有の伝統と認識され、タイにおける国家の近代化をささえる思想となった。ラームカムヘーン王碑の出現は時あたかも西洋の衝撃を受けた時代であり、華僑の大量流入を迎える時代であった。ラームカムヘーン王の時代をタイ歴史の始まりとして組み込み、この歴史を学んだ政治的リーダーは、その理想を現代に具現しようと政治や社会を動かしてきたと分析する。そして、タイ民族史を描く歴史観と相まって、国王、民族、宗教という国家の公的イデオロギーの形成へと用意されていたと見る。

桃木至朗は、北の中国に対抗して中華意識をもつベトナムが、10世紀から19世紀の間に北の大国、中国に対してどう意識したか、ベトナム王朝の正統性原理の背後にある地理的・歴史的な認識の変化を検討した。ベトナムの王朝国家にとって、中国との対抗が正統性の根幹をなすが、自称する国号やベトナム建国説話の扱いに、多重性と変化があることに着目し、「中国化」と「脱中国」を両立させることで、正統性を維持してきたと説く。ベトナム王朝国家にとって、ベトナムの非中華的要素は一時的、例外的なものに見なしてよいのか、という疑問を呈する。

渡辺佳成は、コンバウン朝前期のビルマの支配者が、「くに」の外枠と内実をどのように意識していたか、王たちの残した詔勅を主たる史料として検討した。ボードーパヤーは中国と対

峙した時、東方の「世界」を支配するのが中国の皇帝であれば、自らを西方の「小世界」の支配者として位置づけ、この時代における勢力拡大は「諸王の王」を認めようとし「王」に対する戦争であった、と考える。ビルマ語の「くに」を意味する「タイン」とその都「ピー」の用語法の差異、さらにコンバウン朝という「くに」は「ナインガンドー」と記され、諸王の王たるビルマ王の居所は「黄金の大ピー」と表現されていることから、「ナインガンドー」という表現を指標とすることによって、自他を区別する支配者の意識を読みとろうと試みた。そして、ナインガンドーの範囲を示す記述から、現実の勢力の拡大縮小を反映するかのように揺れ動きながらも、王朝の枠組みの内と外を峻別する、自他の区別の意識が見られることを明らかにした。

菅谷成子は、現代のフィリピンにつながる基本的枠組みを与えたのは、中国系をはじめとするメスティーソを主体とした有産知識層であったとし、中国系メスティーソが18世紀中葉のフィリピン植民地社会で台頭してくる様子を、数年来の研究テーマとして取り組んできた。本論では、フィリピン諸島における「魂の征服」すなわち世俗の植民地支配にあわせてカトリシズムの普及をめざすスペインの支配のもとで、出稼ぎ型の中国人移民社会が、非カトリック中国人の追放によるカトリックへの改宗や、それに続く現地女性との通婚によるカトリックへの改宗によって、現地化して中国系メスティーソを産み出した定住型の社会へと変容していく実態を、現地に残る資料から分析した。

われわれの研究班は故土屋健治教授を代表とする計画班「外文明と内世界」に所属していた。平成6年度には、土屋教授の班と合同研究会を開催したいと、お互いに声をかけ合っていたのが、土屋教授は病に臥し、われわれもまた忙しさのうちに歳を越してしまい、ついに果たすことができなかった。果たされなかった約束に代えて、ささやかながら本論集を土屋教授の霊前に供え、あまりにはやく先立って逝かれた教授へ哀悼の意を表して、土屋教授のご冥福をお祈りする次第である。

平成8年1月10日

研究代表者 吉 川 利 治